

# 中学校社会科地理的分野の探求学習指導案

## —「世界と日本の結び付き」の学習を例として—

和田文雄

中学校社会科地理的分野においては、生徒による主体的な学習としての探求学習能力の育成がその学習目的として重視されている。本稿では、それをすすめるための具体的な指導方法としての教師による探求を授業の形で例示する指導法を提案する。その例として「日本と世界の結び付き」の学習をとりあげ、「東南アジアと日本—エビを通して考える—」の学習指導案を教授書の形で提示する。この学習は、東南アジアと日本の結び付きをエビを通して理解し、その問題状況の把握とその解決について考えさせるというものである。これは学習指導要領の「国際社会に生きる日本人としての資質を育てる」ことに結びつき、「学習内容の厳選」の趣旨にも沿うものである。さらに今日、地理教育にとっても重要な意味をもつ「持続可能な開発」の視点からの地理学習でもある。

### I. はじめに

生徒による主体的な学習としての探求学習能力の育成は、中学校社会科地理的分野の目的として重視されている。しかし、その指導方法について教育現場において意識統一は十分にはなされていない。本論では、それをすすめるための具体的な指導方法を検討し提案する。生徒による探求学習の指導として最も有効な方法は、教師による探求の例示による指導である。本稿ではその指導例として、「日本と世界の結び付き」の学習をとりあげ、「東南アジアと日本—エビを通して考える—」の学習指導案を教授書の形で提示する。この学習は今日、地理教育にとっても重要な意味をもつ「持続可能な開発」の視点からの地理学習としても位置づけられる。

### II. 教材開発の視点

#### (1) 指導の目的と意義

現行の中学校学習指導要領社会科は、「基礎的・基本的な内容に厳選し、学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など児童生徒の主体的な学習を一層重視する」としている。すなわち生徒の「自ら学び、自ら考える力を育成すること」に特に重点がおかれている。社会科地理的分野は前学習指導要領と比べ、現学習指導要領においては、その学習目標が地理的認識すなわち内容知から学び方や調べ方である方法知にウエイトをおくものへと大きく転換したのである。本稿では学び方や調べ方の能力を育成するためにいかに学習指導をするか、という指導方法に焦点をあて考察する。このことについて議論はあまりなされていない。その進め方についてはすでに自明のことなのであろうか。自ら学び自ら考え追究するのは生徒であり、教師ではない。教師はそれを指導するのであるが、ただ指示するだけでいいのらう

か。1クラス40名余の生徒それぞれが探求するテーマの設定からその過程における指導、さらにはその成果の評価を一人の教師がしなければならない。教師の負担は大きい。そのための有効な方法のひとつは、教師がその手本を、すなわち教師が自ら探求したことを生徒に具体的に示すという方法である。これは授業の形態をとるが、その準備は周到になされねばならない。なぜならば、これは影響力が大きく、その指導が適切になされれば、効果的な方法であるからである。ここで教材開発し、作成した指導案は、それを意図して作成したものである。生徒はこの授業をふまえ、それを模範として自ら学び・調べる。すなわちその授業を手がかりとして、自ら探求するのである。

このような授業は、以下の要件をできるだけ有し、準備される必要がある。①その学習内容が、生徒の生活と結びつく具体的なモノを扱っていること。②探求の方法やその過程（プロセス）が生徒にできるだけわかりやすく示されていること。③生徒がそれからあらたなテーマを想起し、探求することができること。この要件を満たすべく教材開発を試みたのが、ここに提示する「東南アジアと日本—エビを通して考える—」である。

#### (2) 「東南アジアと日本—エビを通して考える—」の教材開発

##### ①学習の意義

この学習内容は、学習指導要領地理的分野の「世界と比べてみた日本」の「地域間の結び付きからみた日本の地域的特色」にあたり、「世界的視野から見て、日本は国際間の交通・通信網の整備が進んでいること、世界の各地と強く結び付いていること、結び付きの深さや内容は相手の国や地域によって特色がみられることを理解させる」を学習目的とする。

教材開発した本学習の意義は次の点に認められる。学習の対象地域としてとりあげたのは東南アジアである。世界地理を構成する一つの地域である東南アジアは日本との関係という視点に立つならば、この地域のもつ重要性は他の地域とは以下の点で異なる。すなわち、①東南アジアは、日本に近接する発展途上地域である。②欧米志向が強くこの地域に関心が薄い生徒にとり、正しい認識が求められている地域である。③太平洋戦争で、日本軍により侵略を受けた地域とほぼ一致し、今日、日本からの経済進出がなされ、日本との関わりが強い地域である。これらは、生徒の正しい東南アジア観の形成のための授業開発にあたり、その前提としてふまえた。

ここではエビをとりあげる。生徒にとって身近な食べ物であるエビは、今日、そのほとんどを輸入に頼っており、とりわけ東南アジアからの輸入が多い。それゆえ、その生産や流通の実態を追求することで、生徒は日本と東南アジアの経済的な関係を具体的にとらえることができる。これは、エビトロール船によるエビの捕獲と冷凍による遠距離輸送というエネルギーの大量消費というエネルギー問題の学習でもある。本来は、その地域の人々が食べるエビがお金の方で奪われているという意見も認識しておく必要がある。さらに、エビの養殖池の造成によりマングローブ林が破壊されているといった環境問題もある。加えて、かつて高級な食べ物であったエビが、なぜ身近な食べ物となったのかを理解することは「飽食の時代」といわれる今日の、日本人の生活のありようについて考える契機ともなっている。この学習は、生徒に日本と東南アジアの経済格差や東南アジアの農村における貧困の問題について考えさせるものである。このことは発展途上地域の「持続可能な開発」の学習として意義があることを示している。この授業は生徒自らの探求をもたらす発展的な内容をもつものである。

## ②指導案の内容構成

学習の意義をふまえ、この授業では、生徒に東南アジアのエビに関する問題状況に至る過程の把握とその解決を考えることに重点をおくことにした。それゆえ本学習のメイン・クエスチョンは、「なぜ、多くのエビが東南アジアから日本に輸入されるようになり、それがどのような問題を発生させ、それはどのように解決したらよいだろうか」とした。

エビは各国の料理にみられ、世界の多くの人々に食べられている食品の一つである。エビは日本において最も人気の高い魚介類であり、日本は世界で最も多く消費し、そのほとんどを輸入に頼っている。日本は世界最大のエビ輸入国である。その輸入先は東南アジア

を中心とするアジア地域が圧倒的に多い。

日本でエビの輸入が自由化されたのは1961年であり、1960年代半ば以降、その輸入量が増加する。それは日本の水産会社と商社が、その輸入を積極的に進めたからである。その要因としては、えびは単価が高く利潤の大きい規格化しやすい商品であり、それに加えて、政府が冷凍食品の普及や200海里の漁業規制への対策としてエビなどの冷凍魚の輸入促進や消費の拡大を積極的にバックアップしたことがあげられる。日本が東南アジアからエビを多く輸入するようになったのは、日本に比較的近く、しかも人件費が安いからである。日本へ輸出するためのエビを一度に大量に獲るエビ・トロール船が、日本と現地の合弁企業により導入されるようになった。この漁法はすぐにエビ資源の枯渇をまねいた。それだけでなくこの漁法はエビ以外の魚の乱獲もまねき現地の零細漁民との対立を引き起こし、さらにエビ以外の魚の投棄により海が汚染されるといった問題も深刻化させた。エビトロール漁法が大幅に制限されるようになり、これにかわってエビの養殖が進められるようになった。海岸部における養殖池の増大は、森林資源であるばかりでなく、魚資源の育成場所であり、防潮堤の機能も有するマングローブ林の破壊をすすめている。エビの価格構成をみると、東南アジアの漁民の受け取る利益はわずかである。また、エビの冷凍工場で働く人の賃金は日本のほぼ20分の1である。エビの乱獲によるエビの価格の上昇は、一部地元民の不満を高めている。

終結部において、生徒にこの問題の解決を考えさせることにした。この問題の解決を考える立場には二つある。ひとつはいわゆる「近代化論」の考えで、国を単位とした欧米先進国を目標に工業化および経済発展を目指すというものである。もうひとつは「内発的発展論」の考え方である。「内発的発展論」とは「さまざまな問題を解く手がかりを、それぞれの地域という単位から考えようとするもので、それぞれの生態系に適合し、住民の生活の必要に応じ地域の文化に根ざし、住民の創意工夫によって、住民が協力して発展のあり方やその道筋を模索してゆくべきであるとする」考え方である。この考え方は「持続可能な開発」立場に立つものである。授業において生徒に、「近代化論」の立場からの考えと、あわせてこの「内発的発展論」の立場もあることを、その解決を考えるヒントとして説明する。

### Ⅲ. 「東南アジアと日本ーエビを通して考えるー」の学習指導案

#### 1. 目 標

日本と東南アジアとのつながりをエビの生産および貿易を通して把握し、その問題状況について理解し、その解決を考える。

#### 2. 内 容

- ①日本は世界最大のエビの消費国でありエビの輸入国である。エビの輸入先は東南アジアを中心とするアジア地域が圧倒的に多い。
- ②日本の水産会社と商社は、東南アジアの国々に合弁会社を設立し、その国の海域でトロール漁を行ったり、現地の漁民からエビを買いあげ冷凍工場で冷凍加工して、エビを日本に輸出している。
- ③エビを養殖する人や冷凍工場で働く労働者の所得は、日本と比べ、けた違いに安い賃金で働いている。
- ④トロール漁によるエビ資源の急減からエビの養殖が急速に拡大し、養殖池の造成によるマングローブ林の破壊などが問題となっている。

#### 3. 学習指導案

展開	発 問	資料	教授・学習過程	習得させたい知識
導入	・エビを使った料理にはどのようなものがあるか		T. 発問する P. 答える	・エビは各国のさまざまな料理に用いられ、世界中の人々に食べられている。
展開 ①	・日本人の一番好きな魚介類は何だと思うか。  ・日本人は現在、一人あたり一年間に、2.7 キロのエビを食べている。日本全体では、一年にどれくらいエビを消費していることになるか。  ・日本のエビの生産量は約 4.8 万トンで残りは輸入しているが、それはわが国の消費全体の何%になるか。  ・日本の食料品輸入額を示したこの表の中のA～Cは牛肉、豚肉、エビのいずれかであるが、第一位のAは何か。  ・日本がエビを多く輸入しているのは、どんな地域の国々か。		T. 発問する P. 予想し、答える T. 説明する  T. 発問する P. 答える  T. 発問する P. 答える T. 説明する  ① T. 発問する P. 予想し、答える  ② T. 発問する P. 答える	・エビはその一つであり、主婦を対象としたある漁業関係団体のアンケート調査(1986年)によると、エビが第1位である  ・約 32.4 万トン。  ・約 85%である。日本は世界一のエビ輸入国である。  ・エビである。  ・ほとんどがアジアの国であり、東南アジアがその半分近くを占める。
展開 ②	・日本のエビの輸入が増えたのはいつ頃からか。	③	T. 発問する P. 答える	・1965年頃から急増している。

・エビの輸入が増えた理由として、1961年にエビの輸入が自由化され、水産会社と商社がエビの輸入を積極的に進めたことがあるこれ以外にどのような理由があるだろうか。

・なぜ水産会社と商社はエビの輸入を積極的にすすめるようになったのか。

・水産会社と商社はそれをなぜ東南アジア地域で行なったのか。

・エビを一度に大量に効率的にとるためにはどのような方法があるか。

・この方法に適した、エビ・トロール船はアメリカで開発されたフロリダ型トロール船とよばれている。この船の構造や具体的な漁法はどのようなものだろうか。

・このようなトロール漁法を行なうために必要なものは何か。

・東南アジアではトロール漁法を行う資本は不足している。それはどのようにしておこなわれたのか。

・トロール漁法により東南アジアの海域で大量のエビが獲られ、日本へ輸出されたが、エビ資源が急速に枯渇するようになり、インドネシアを除き東南アジアのほとんどの海域でこの漁法は禁止された。トロール漁法にはこのほかにどのような問題があるだろうか。

T. 発問する  
P. 考える  
T. 説明する

T. 発問する  
P. 考える  
T. 説明する

T. 発問する  
P. 答える  
T. 考える

T. 発問する  
P. 答える

④ T. 説明する

T. 発問する  
P. 答える

T. 発問する  
P. 考える  
T. 説明する

T. 発問する  
P. 考える  
T. 説明する

・冷凍食品が一般家庭にも普及したこと。また200カイリ対策として政府もエビなどの冷凍魚の輸入促進や消費の拡大を積極的にバックアップした。

・エビは単価が高く、利潤の多い商品であり、さらに規格化された扱いやすい商品であるから

・人件費が安く、位置的に日本に近いから。

・海底のエビを獲るには海底を網で曳く漁法が一番効率的である。

・④で説明する。船の全長は24～27メートル、100～150トン級が普通で、400～500馬力である。張出し・収納が可能な二本の主網、魚群探知機や冷凍設備を装備する。少人数の乗組員の合理的な漁法は、省力化を容易にしている。この漁法は日本の沿岸では禁止されている。

・多くの資金が必要。

・日本の水産会社と商社が出資し、合併会社を設立し、その国の海域で大規模トロール漁をおこない、エビを冷凍し、日本へ輸出する。

・トロールの漁場を伝統的な漁場としている零細漁民との対立・紛争。漁場が荒らされ、他の魚が捨てられることにより海も汚染する。

<p>展開 ③</p>	<p>・トロール漁法が大幅に制限されるようになり、漁民からエビを買い上げるか以外に東南アジアでエビ確保することがむづかしくなった。そこで注目され、拡大するようになったエビを生産する方法は何か。</p> <p>・日本への輸出用の養殖エビは東南アジアで具体的にはどのように生産されているか。</p> <p>・東南アジアの海岸に普通よくみられる植生をマングローブというが、これはどんな特徴をもった植生か。</p> <p>・マングローブは森林資源、例えば薪や炭といった燃料以外の資源的価値にはどのようなことがあるか。</p> <p>・東南アジアのマングローブは現在どのようになっているか。</p> <p>・マングローブ林を伐採してエビの養殖池を造ることにどのような問題があるだろうか。</p>	<p>⑤</p>	<p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 説明する</p> <p>T. 発問する P. 考える T. 説明する</p> <p>T. 発問する P. 考える T. 説明する</p> <p>T. 発問する P. 考える T. 説明する</p>	<p>・エビの養殖。</p> <p>・いままでの養魚池でのエビの養殖と新しく造られたエビの養殖池での養殖。</p> <p>・⑤を説明する。</p> <p>・魚資源、たとえばエビ（稚エビの育つ場所でもある）、カニ、貝類とか魚が成長繁殖する場所である。防潮林の役目ももっている。</p> <p>・エビの養殖池の造成などにより東南アジアでもっともマングローブ林急減しつつあり、タイでは現在、マングローブ林がほとんど残っておらず、フィリピンでは、2000年には消滅するといわれている。</p> <p>・森林資源としての枯渇。生態系が変化し、漁業資源の生産場所が縮小する。防潮堤としての機能が低下し、波の浸食作用による海岸線の後退など。の広いインドネシアでは</p>
<p>展開 ④</p>	<p>・資料⑥はエビの価格構成を示しているが、このエビを獲っているインドネシアの漁民のエビ1キロあたりの純利益を300円とし、それを日本の消費者が4000円で購入したとする。日本の消費者が買うエビの何%が漁民の利益ということになるか</p>	<p>⑥</p>	<p>T. 発問する P. 答える</p>	<p>・7.5%である。</p>

	<p>・資料⑥でみると、一番大きな利益をあげているのは誰だろうか。</p> <p>・インドネシアのエビ冷凍工場の常雇い労働者の労働時間は一日8時間で、平均賃金は250円である。日本との賃金格差はどれくらいだろうか。</p> <p>・彼らはなぜこのような安い仕事に従事しているのだろうか。</p> <p>・彼らはエビを買ってまで食べないといわれる。なぜだろうか。</p> <p>・この写真は、インドのある光景を示している。女性たちは何をしているのだろうか。</p>	<p>⑥</p> <p>⑦</p>	<p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 発問する P. 答える</p>	<p>・エビの冷凍業者・輸出業者および日本の鮮魚店であり、次いで地元の大手の集買業者(コ-ディネター)である。</p> <p>・日本とおよそ二十倍近い賃金格差がある。</p> <p>・他に仕事がない。同じ冷凍工場で働く日雇い労働者の賃金はさらに安い。</p> <p>・かつては食べていた。エビが高価な食べ物となったため。</p> <p>・インドのゴアで、日本のエビの乱獲に抗議するためにデモをしている。</p>
<p>終結</p>	<p>・東南アジアで日本むけのエビの養殖や冷凍などの仕事にかかわっている人々の住む国や地域が発展するためにはどのようなことが考えられなければならないだろうか。</p>		<p>T. 発問する。 P. 自由に答える。</p>	

教授資料及びその出典

- ①「日本の食料品輸入額(1998年)」……………「通商白書」平成11年版より作成
- ②「日本のエビ輸入量(2001年)」……………「通商白書」平成14年版より作成
- ③「エビの国内生産量、輸入量、1人あたり消費量」……………村井(1988)p.4より
- ④「エビを獲るトロール船」……………村井・鶴見(1992)p.113より
- ⑤「マングローブについて」……………筆者作成
- ⑥「エビの価格」……………村井・鶴見編(1992)p.14より
- ⑦「デモをする女性たち」……………河村(1995)p.104より

IV. おわりに

この授業は、中学校学習指導要領社会科が目標としている「国際社会に生きる日本人としての資質を育てる」ことに寄与する学習であり、同じく「学習内容の厳選」の趣旨にも沿うものである。この学習は、生徒が、発展途上国の立場での「持続可能な開発」について考える契機となるものである。本稿で提示したのは、生徒自身の主体的な学習としての探求学習能力の育成のための教師による探求としての授業案である。

生徒がこの授業からどのような探求のテーマを発想し、新たな学びを発展させることができるか、という点で本学習指導案はさらに改善する必要がある。それは授業実践をふまえておこなう予定である。

## 参考文献

- 東京水産大学公開講座編集会編(1984)：『日本のエビ・世界のエビ』成山堂書店
- 森分孝治(1984)：『社会科学的概念学習の授業構成 (IV) - 「東南アジア」の教授書試案 -  
広島大学教育学部 学部附属共同研究体制研究紀要 第12号
- 鶴見良行(1988)：『エビ・ナマコはどこから』新幹社
- 村井吉敬(1988)：『エビと日本人』岩波新書
- 鶴見和子・川田侃(1989)：『内発的発展論』東京大学出版会
- 宮内泰介(1989)：『エビと食卓の現代史』同文館
- 藤本岩夫(1991)：『えび養殖読本』水産社
- 村井吉敬・鶴見良行編(1992)：『エビの向こうにアジアが見える』学陽書房
- 日本消費者連盟編(1993)：『飽食日本とアジア』家の光協会
- 河村則彦(1995)：『身近で「日本と世界」をとらえるワーク』社会科教育 No.411
- 鶴見良行(1995)：『東南アジアを知る－私の方法－』岩波新書
- 和田文雄(1997)：『東南アジア理解学習の改善にむけて』地理の広場 第93号
- 多屋勝雄編(2003)：『アジアのエビ養殖と貿易』成山堂書店